が不自由な人との共生が社会の大きな課題なんだとすると、それを体験できる小中学校にするべきだと私は思うんです。

民輪　私が加西に帰った時、学校は数で統廃合する考え方が当然のようにあったんです。でもやっぱり、それって数による効率なんですよ。学校もたくさんあっただけ修理しなきゃならない。そうすると直すのに何千万もかかったりするでしょ。

加藤　で減らす減らすってね。

民輪　そう。私は市内で一番小さい小学校で育ったんです。地域で子どもたちを見守り、支えながら、小規模でもいいと思う。小規模の方が子どもたちはのびのび幸せで生き生きとしている。でも、競争心が育たないとか、コミュニケーション力が育たないとか言うわけです。そんなことはありえない。もうちょっと覚悟を持って子どもたちを育てましょうよ。

加藤　なるほどね。とにかく学校は楽しいって言えるところにならないとダメですよ。私は気が弱かったから、なんかミジメでしたけど。でも生きる力はついたな（笑）

民輪　心のふるさとはやっぱり小学校にあるような気がします。

給食と地域のつながり

民輪　加西市は給食費を全面無償化にしたんですね。賛否両論あるんです。「そんなことするからお母様方は料理をしなくなるんです」と言われたり。だけどやっぱり働いている母親もいるし、無償化することで地産地消もやりやすくなっているわけ。

加藤　給食ね。鴨川の方の学校も給食センターからきてるけど、一度孫が入学したころ言ったわけ。「横の畑にある野菜をとってきてここで給食作ったらどうですか？」って。そしたら笑われました。あなたシステムを何にも知らないねと。でも今は給食を変えようっていうのがブームになっています。無償化するってことはシステムを変えるってことですよね。自分たちのところで自立した給食をしようっていう。それぞれの学校で作ろうっていうシステムまでいってるんですか？

民輪　そこまではまだ。私は、本当は自校方式で作ったほうがいいと思うけどね。お昼になったらいい匂いがしてきてワクワクするとか。加西市は1日3300食も作るんですよ。そうすると大変な消費活動になるわけですね。地域の野菜とかをもっと使いたい。お米は全面的に加西産を使ってるんだけど、なかなか一度決まってしまったシステムをもう一度見直して、やり直すというのは、これはね頑強です。

加藤　貧しかった時代。すごく豊かだった部分があるわけ。昔、地方のキャバレーにもフルバンドが入っていたりして。今は、フルバンドが入ってるお店なんてないですよ。全部コストダウンで。学校給食は、各学校でやるのは当たり前だった。センターっていうシステムは効率化しょ？　効率化って言っても、集め、作って、どこかへ運ぶっていう、そこそSDGsの観点から言っても、C2を出して車で運んでいる。そういう味でのコストも全部考えると、必ずし効率のいいコストかどうか分からない。ただ、一括して管理しやすいだけと思う。一括管理を優れた進歩である考えて邁進してきた。日本社会がね。

民輪　加藤さんが言ってくれるからいい。私が言ったら、袋叩きに遭うわ（笑）

加藤　コロナがあったり、気候変動があったりで、農業が一番被害に遭うじゃないですか。20年前に他界した夫が、有機農業そのものは、循環が前提になってやっているから、地域でその循環を回す必要があると提唱したんですね。最近ようやく、有機農業を大事にしようとする時代になった。

民輪　20年かかったのね。

加藤　耕す人も、食べる人も一緒に農業をやっているんだという考え方ですね、その始まりが給食なんです。

民輪　でもね、随分変わってきました。子どもたちが、加西市でもお米がどうやってできるか？　お野菜を植えたらどうなるか？　と、学校で具体的に体験させるようになってきてるのね。科学技術はもう十分、というチェルノブイリの子どもたちの命の原点からいくと違うように思われちゃうかもしれないけど、本当は同じSTEAM教育をやり始めたところです。

加西STEAM

民輪　加西市というのは、自然豊かで、蛇や虫が好きな子もいれば嫌いな子もいる。そういう中で育っているからこそ、人間ならではの批評精神や自分自身の論理を、未来に向かって構築できる子を育てたい。ただ昔を懐かしむだけじゃなくてね。そうした力を、これから先の予測できない未来に向かってどう育て、社会を動かしていくか。挑戦し、他者を大事にする子どもを育てましょうということで、加西STEAMと名付けました。今、子どもたちが20年後の加西市への提言などをするようになってきた。そういう取り組みをやっているんです。

加藤　先日行かせて頂いたとき、特攻隊の訓練所のガイドを子どもたちがやっていました。ああいう活動も素晴らしいし。すごい財産ですね。観光的にもそうだし歴史的にもそうだし。だから加西STEAMは楽しみ。

民輪　どうやって現在を見つめなおすか。学校の若い先生たちはそういう視点を持っているんですよ。子どもたちもそういう力を持っている。だから最後は子どもをどう信じてあげるかだと思うんですよ。転ばぬ先の杖をはいはいと次から次へと渡すんじゃなくて。子どもたちがつまずいてもいい。立ち上がる力を信じてあげる。子どもたちの力を。そういう教育が、加西ならではのオリジナリティにつながっていくといいなと思っている。子どもの頃に体で覚えたことってすごいんですよ。

加藤　昔は、男の子は木工で、女の子は裁縫と家庭科に分かれてましたね。本当は両方やったほうがいいよね。もう今は男女別々にはしないでしょうけどね。男の子も裁縫、女の子も大工さんやったほうがいいと思う。生きるために必要な技術って、ちっちゃいことが大事なんです。物をきちっと並べるとか、ぐちゃぐちゃになっていたら片づけるとか、汚れていたら拭くとか。そういう一般的に言うと家事に類することが身についていないと。だから、私はプロフェッショナルな人って、目の前でコップが倒れた時に、その水が流れていく、その行き着く先が読める人だと思うの。さっとその一番向こう側で水を止めようとする。コップが倒れたことで慌てちゃうようではプロとは言えないし、破綻したときの結果がすべてが読めている人じゃないとプロじゃない。

新時代のリーダー像 加西のこれから

民輪　これからの時代を担っていく新しいリーダー像っていうのはどういう人だと思います？

加藤　う～ん。事務所持って思うけど、その人たちって横の連絡が悪いわけ。要ないことはしゃべらないわけ。女性はちゃくちゃしゃべるので繋がりやすいです。女の子がもっとリーダーになってもいいと思う。でも今は男性的なシステムの上にいるじゃない。だから女性が上に立った時に働きにくいと思う。そうでしょ？　まさに。

民輪　女性の観点とか視点は生理的にも男性と違う。同じである必要ももちろんないし、同じであってはいけないと思う。それが多様性の第一歩。

加藤　女性には束ねていく力があるよね。間をつないでいく力があるのよ。統率して、上に立つ能力があるというわけじゃないけど、横をつなぐ力というのはあるような気がするな。

民輪　新春だから少し宣伝をさせてもらいます。加西市はまずSDGs未来都市に指定されました。それでなおかつ、STEAMを中心としたデジタル田園都市国家構想も、国の採択を受けました。地方の人口4万ちょっとの都市で、ほんとに小さなまちですよ。そして11月に環境省の脱炭素先行地域になったの。

加藤　誇らしいですね。若い人が加西にとどまるまちにしてください。ここはちょっと特別な可能性のあるまちだって。未来に向かってプランを持てる。若い人に何かできる。それが一番の教育ですよね。

民輪　ありがとうございます。

加藤　応援してます。ありがとうございました。

スタジオに置いてある大きな器。大切なピアノの乾燥を防ぐため、お水を張るという気配りが。

「百万本のバラ物語」
加藤登紀子著
出版社 光文社

「百万本のバラ」。加藤登紀子さんが40年近く歌い続けるこの歌は、国境を超えて、人の心をつなぐ歌としての運命を生きています。ロシアとウクライナ、その周辺国に生きる人、追われた人たちとの出会いを、歌と人生とともに綴られています。

登紀子さんのお正月

「芸能人のお正月はハワイかどこか南の島で」と想像してしまいますが、実は、登紀子さんは、毎年、千葉県鴨川市で家族とともに過ごされます。おせち料理は登紀子さんの手作りが恒例。味の薄いものから、だんだん濃いものを作っていくのがコツ。「そろそろ子どもへバトンタッチしてもいいかな」と笑顔で。

写真：㈱トキコ・プランニング提供